練馬区立旭町小学校　学校だより　２月号　平成２９年１月３１日発行　校長　道山　正史

きらめく風

すすんで学ぶ子ども　心ゆたかな子ども　体をきたえる子ども

成人の日に思うこと

旭町小学校　副校長　吉井　広明

１月９日は成人の日でした。ニュースや新聞で楽しそうにしている若者の姿が見られました。羽目を外しすぎの人もいましたが、多くの若者は楽しそうにしていて若いっていいなぁと思いました。

私が二十歳になった時の実感は「自分が二十歳でよいのか」というものでした。二十歳を過ぎてから読んだ村上春樹の「ノルウェーの森」で二十歳になることを「後ろから押し出される感じ」と表現していたことに妙な共感を覚えたものです。二十歳というともう一つ思い出すのが「二十歳の原点」という本です。二十歳という若さで自殺をした学生の手記をまとめたものですが、私は２５歳ぐらいの時に読みました。内容はほとんど覚えていませんが、筆者の思いに共感しながら読んだことを覚えています。そして、読後に思ったことは、この筆者もあと５年生きていれば自殺をせずに済んだのではないかということです。若いときはいろいろと悩みます。ソクラテスもプラトンもみんな悩んで大きくなったというキャッチコピーがありましたが、私も同じく悩んで大きくなりました。時には、気がふさいでこのまま死んでしまったら楽だろうななんて考えたこともあります。しかし、私が、今まで命を大事にして生きることができたのは、小さい頃から親によく言われていた「親より先に死ぬことほど親不孝はない」という言葉があったからではないかと考えています。私の親は、ニュースを見ては時には怒ったように、時にはしみじみと「あんた、親より早く死ぬんじゃないよ。」とよく言っていました。子供の頃はそんなこと当たり前だろうくらいにしか思っていませんでしたが、何度も言われているうちに自分の中で当たり前のことになっていたのかもしれません。

若者が亡くなったというニュースを聞くたびに心が痛みます。命はかけがえのないものでその人がいなくなってしまったらどんなに悲しいか、日頃から伝えていくことが大切だと私は思います。